
魔法少女リリカル マギカ (第1話) 魔法少女大決戦 (改)

気導士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカル マギカ (第1話) 魔法少女大決戦 (改)

【Nコード】

N3846T

【作者名】

気導士

【あらすじ】

改変後の世界で、謎の魔獣と戦う、ほむら達、魔法少女チーム、苦戦する彼女達の前に現れたのは、時空管理局の魔導師、なのは、フェイト、はやての3人だった。

.....あなたは、覚えているだろうか？

あの、魔法少女たちを。

魔法少女を愛する人がいる限り、魔法少女は何度でもよみがえる。

魔法少女史上、最大最強の決戦が今、始まる！！！！！！

次回、魔法少女リリカル マギカ

第 1 話 《魔法少女大決戦（改）》

に、ご期待ください。

リリカル・マギカル

希望を胸に！！！！

2011 / 6 / 9 会話部分を中心に修正・加筆。

戦闘・会話シーン追加。作品タイトル変更。

2011 / 6 / 19 第1章・第8章 加筆・修正。

この作品は *novelist* にも投稿してあります。

第1章 ふるさとの世界に（前書き）

これは、

ほんの少しの奇跡があれば、

ありえたかもしれない

出会いと 希望の 物語。

魔法少女リリカル マギカ
始まります。

第1章 ふるさとの世界に

あれから、どれだけ時が過ぎ去ったのだろうか。

ある日、まどかとさやかは、ひさしぶりに、ふるさとの、見滝原に降り立った。

もちろん二人は、高次元生命体なので一般人はその姿を認識できない。

『ごめんよ、まどか、あたしのわがままに、つきあわせて』

『ううん、いいよ、さやかちゃん。』

わたしだって仁美ちゃんの花嫁姿をひと目見たかったんだから』

二人がなつかしいこの町にやって来たのは、恭介と仁美の結婚式を見守るためである。

結婚式が行われたのは、大きな白い教会だった。

最近建てられた教会らしく、その壁はひびひとつなく、全体像は西洋の白銀の城のようにも見える。

結婚式のプログラムは、夕方から開始された。

この時間帯からの、式のスタートは、この町では珍しいが、恭介の演奏家としての仕事が順調で多忙な事が原因らしい。

式が進み、やがて純白のウェディング・ドレスにその身を包んだ仁美が現れると、参列者たちから、ため息と、歓声があがった。

それは、まどかも同じだった。

『きれい……………』

『うん』

さやかも、まどかと、ほとんど同じ気持ちである。

これは当然なのだが、恭介も仁美も、中学生の頃から比べれば、立派な大人であり、さやかから見ても、

二人は、いわゆる、美男美女の、似合いのカップルだった。

まどかにとっても、神前で、愛の誓いを交わす

二人の姿は、とても眩しいモノに見えた。

『……………』

『どうしたの、まどか？』

『な、なんでだろ、

涙 とまらないよ。

別に悲しい事なんて

何も無いはずなのに……………』

『……………』

もう、いいや。

そろそろ出ようか、まどか』

『うん』

式はまだ続けていたが、まどかと、さやかは、教会を後にした。

鹿目まどかには、この世界に魔女が生まれないように、因果の調整をしようと言った、重要な役割が有るのだが、魔法少女の因果の変動を感じない限り、やる事がないため、今は時間に余裕が有ったのである。

二人は夜の見滝原をしばらく散歩する事にした。

今は4月中旬である。

月の光に照らされた、夜の桜並木が美しい。

どこからか、花見をしているらしい人達の笑い声が聞こえてくる。

ふと、まどかが、言葉をこぼす。

『結婚・・・したかったな』

『結婚かあ、』

そうだね。

でも、もう、あたしたちは……………」

そう言うと、さやかは、夜空を見上げた。

『あ!!』

まどかが、人間に戻って、

良い人と結婚できますように!!!

まどかが、人間に戻って、

良い人と結婚できますように!!!

まどかが、人間に戻って、

良い人と結婚できますように!!!

まどかが、人間に戻って、

良い人と結婚できますように!!!

……………」

『

』ど、どうしたの、さやかちゃん？

いきなり?』

『あー、いや、今、流れ星が見えたんです。

ちょっと、願い事をね』

『……………ありがとう、さやかちゃん。』

私、その気持ちだけで十分だよ』

『そっか』

『……………』

『そろそろ、向こうに、帰ろうか？』

『そうだね。』

帰ろう、さやかちゃん』

まどかと、さやか、の二人は、
本来の居場所である高次元空間に移動しようとしたが、
その途中で、何者かの罠にかかったかのように、
次元の狭間に落ち込んでしまい、自力で動けなくなった。

『な、何よ、これ?!今の私たちが、動けなくなるなんて』

『こんなの今まで、見たことがないよ。』

まるで誰かがここに罠をしかけたようなの?』

『二人とも、そのまま動かないで。』

今わたしが次元の狭間を分解して、あなた達を引き上げます』

声のする方を見ると、そこには黒い服装を着た、

とても美しい銀色の長い髪の女性がいた。

良く見るとその女性の背中からは黒い翼が出ている。

だが、まどかには彼女が一瞬天使のように見えた。

そう、まどかとさやか二人を助けたのは、あの初代リインフォースであった。

リインフォースの体から白銀の魔力光が放射され、次元の狭間は割られた薄いガラスのように砕け散った。

この初代リインフォースと言う女性は、

『夜天の書』と言う魔導書の管制プログラムであったが、過去に、有る事情で、2人の魔導師に自分を破壊してもらったのだ。

その後、リインフォースは、

まどか達と同じ高次元生命体として、生まれ変わった。

そのリインフォースが二人に告げる。

『あなた達のふるさとの世界に危機がせまっています』

第2章 落ち着いている場合ですか

その頃、マギカ宇宙の、ほむらやマミ、杏子達、魔法少女チームは強力な謎の敵に包囲され、危機的状況にあった。

その魔獣の放つ魔力弾をジグザグに高速移動して回避しながらも、なかなか反撃のチャンスを掴めず、佐倉杏子はイライラしていた。

「な、なんなんだよ、こいつらは?!?!」

「こんな魔獣なんてありえねえぞ!!!!」

魔獣とは、人間の負の感情エネルギーが実体化した怪物であり、魔法少女にとっては、駆逐すべき敵である。

その外見は、白い衣を着たスキンヘッドの巨人の様なモンスターである。

頭部は実態が一定しておらず、破損した複数のキューブ状に分裂して揺れ動いているのが目視できる。

通常の魔獣は、ほむら達の世界の尺度で約30から50メートルの全高を持つが、今、目の前にいる魔獣たちはどう見ても全高70メートルはあった。

さらに、奇妙なのは攻撃方法である。

魔獣は、普通、先端がツメのように鋭い白い糸状の触手のような器官を伸ばして、

敵に突き刺すという物理攻撃を行う。

だが、今、ほむら達が相手にしている魔獣たちは、赤い色の炎熱系の魔力弾を武器にしていた。

魔法の弓を手に、赤い魔力弾を回避中の暁美ほむらが杏子に返事を返す。

『たしかに。』

この世界では今までにこんな魔獣は出現したことがないですね。』

魔獣の放つ魔力弾は、直進するのみで、ホーミング（自動追尾）はしないので、

回避するのは簡単だった。

ほむらは、敵の攻撃の隙について、杏子を援護したいのだが、狭い結界の中で、複数の魔獣が魔力弾を連射してくるので、そのタイミングが難しい。

そして、ほむらに比べると、スピードの遅いバマミは、連射される魔力弾を避けるだけで、精一杯だった。

『落ち着いている場合ですか?!!』

確かにこの奇妙な魔獣は、3人が今までに倒した魔獣とは、攻撃力、防御力、スピード、そして魔力と全ての点で段違いとしか言いようがなかったのである。

彼女達の目の前にいる敵の正体は、ロストロギア融合魔獣だった。

ロストロギア（古代遺物）、サイコクリスタルについて、解説。

本来の機能は人間の精神エネルギーを吸収して、魔力エネルギーに変換すると言う物。

魔力資質の無い人間に、魔導師の能力を与える事を目的として、レジアス中將がスカリエッティに製作を依頼した物と思われるが詳細不明。

基本的形状は、透明な六角形のクリスタル。

六芒星（正三角形と逆三角形の組み合わせ）の魔法陣の中心に球体の石があり、

この球体の石は機能コアであり、六割ほどがクリスタルに埋まっている。

機能コアの球体の石は、初期状態で、色がスカイブルーですが、人間の精神エネルギーを吸収するとしだいに色が、深い青に変化し、次に紫、次に赤、最後に黒く変色します。

黒く変色後、さらに精神エネルギーを吸収すると、そのエネルギーを元に自分の自意識を持つようになり、石の中心に目が出ます。

発生する目の色や形は、どのような感情の精神エネルギーを吸収したか

によって異なり、人間のような目の場合もあれば、

猫のような目、爬虫類的な目の場合も有ります。

サイコクリスタルは、最初は魔獣に寄生して、魔力を与えますが、

その内自分の自意識を持つと
魔獣の体に乗っ取り自分がコントロールコアとなります。

本事件終結後、かなりの時間がたってからサイコクリスタルの中心の石には、

インキュベーターの母星でしか採取できないはずの特殊な鉱石が含まれている事が判明します。

この特殊な鉱石をスカリエツティに譲渡したのは、
ハチベえと言うインキュベーターであることが、
さらに後になってから、明らかになります。

彼は、自分ではいつも良い仕事をしていると、思い込んでいるのですが、
いつも悪い結果しか、残さないのです、パートナーの魔法少女達だけでなく、
同族からも、うっかりハチベえと呼ばれています。

彼は別に頭が悪いわけではなく、知能も高いのですが、
自分の行動の結果がどういふものになるか、
予測する洞察力や直感性に欠けているようです。

第3章 魔法少女なんだが

ほむら達3人は、融合魔獣の攻撃を回避している内に、結界の端の方に追い込まれていた。

ボクシングなどに例えるならば、ロープ際に追い込まれ攻撃を受けすぎてグロッキー状態の選手と言ったところである。

さすがに、ほむらにもあせりの色が見えた。

『くっ、このままでは。』

『魔力を消費しすぎて、3人とも消滅するしかないですわ。』

『冗談じゃねえ!! このまんま消えてたまるかよオ!!!!!!!!』

今では、魔法少女同士で協力し合うための連合会が組織されていたが、他の魔法少女とのテレパシー通信も魔獣たちにより妨害されているようだ。

じりじりと包囲を狭めるロストロギア融合魔獣たち。

その目はまるで、獲物を追い詰めた喜びに、笑っているかのように見える。

キン！ バキィー！！

その時、金色の閃光とともに、特殊結界を切り裂いて、乱入してき

たのは、

時空管理局の魔導師、なのは、フェイト、はやての3人だった。

時空管理局とは、

- - - - - 広大なる虚数空間の中に、

宇宙のインフレーション活動によって生まれる無数の宇宙

- - -

すなわち多次元世界の中でも、魔法文化の特に発達した
ミッドチルダ世界において設立された組織である。

その本質を簡単に説明すれば、

法を守り犯罪者を取り締まる警察組織としての部分と、

各次元世界で戦争・紛争・内乱等が起きた場合に行動する治安維持
軍としての
部分が存在する。

又、災害発生時の人命救助や

各次元世界の文化、科学・魔法技術の保護・研究も
時空管理局の任務の一部である。

(登場する少女たちの、年齢と、外見について、解説。

なのは達は中学1年生頃の年齢です。

なお、まどか最終回のラストシーンで

ほむらの姿が変化していないように見えたので、

マギカ宇宙の魔法少女は老化しないと推測して、ほむら達も原作
同様の姿。)

『なのは！ あれを見て！！』

『か、怪獣?! と言うより巨人?』

『その怪獣だか巨人だか、に、魔導師の女の子たちが、襲われとる!!』

『助けよう!!』

『了解や!!』

なのはに答えた八神はやてが、

『夜天の書』と言う名の魔導書を手にして、詠唱を開始した。

『彼方より来たれ、ヤドリギの枝、銀月の槍となりて・・・』

はやてが、魔法の詠唱をする間、先に攻撃動作に入ったのは、時空管理局の白い魔王こと、高町なのはである。

高町なのはは、フェイトほどではないが、魔法戦の実戦経験が長い。

彼女はまだ9歳の頃から命がけの数々の戦いをくぐり抜けている。

なのはには砲撃魔導師としての天賦の才能があり、

さらに、その手にある高性能インテリジェント・デバイス、

レイジング・ハートがその実力を100パーセント引き出していた。

インテリジェント・デバイスとは、AI（人工知能）を搭載し、
实用レベルで魔力を運用するのに必要な高速演算処理を可能とする
魔導師専用の自律思考型端末である。

なのはにとって、

レイジング・ハートは、単なる道具でも、機械でもなく

心と命を持つ自分の親友とも言える存在である。

もともと、このレイジング・ハートは、ミッドチルダを中心に活動している、遺跡探索を主な仕事としている種族、スクライアの少年ユーノが発見、所持していた詳細不明のデバイスである。

そのレイジング・ハートが、なぜか、魔力・魔法には完全に素人だった少女、高町なのはを気に入ってから、

『二人』の間には、心と心の、命と命の、信頼関係が確かに育っているのだ。

なのはと、フェイトが現在着ている服装についてだが、これはバリアジャケットと呼ばれる魔導師専用の戦闘防護服である。

バリアジャケットは、二人が元々着ていた服、今は時空管理局の制服を元にして彼女らのインテリジェント・デバイスが魔法で構成したもので、バリアジャケットの名の通り、敵の攻撃を防ぐバリアと、高温・極低温などを遮断するフィールドを複合発生している。

なのはが着ているバリアジャケットは、セイクリッド・モードと言われるもので、白を基調にしており、一見するとドレスのようにも見える。

（ なのはは、まだ教導隊入りしていません。 ）

ところどころ、濃いブルーのアクセントが有り、各部の魔力増幅用フィールドジェネレーターの赤い宝石と胸の大きな赤いリボンがおしゃれポイントとも言えた。

『やるよ！ 長距離砲撃！！』

なのはの声に、愛機レイジング・ハートが答える。

「バスター・モード！」

レイジング・ハートは砲撃特化形態バスター・モードに変形した。反動吸収用のブレーキ・ウイングも展開する。

「ドライブ・イグニッション！」

なのはは、レイジング・ハートから思念波で伝えられるターゲット・イメージに従って、敵に狙いをつけた。

ターゲットは、なのは達に気がついて、無造作に接近してくる魔獣の一団である。

『いくよ。』

「ロード・カートリッジ！」

レイジング・ハートは、マガジン（弾倉）から2発の魔力カートリッジを装填した。

その魔力カートリッジに込められていた魔力は、カートリッジの炸裂によって、レイジング・ハートとなのはの体に

チャージされる。

なのはの足元に、桜色のミッド式円形魔法陣が形成され、レイジング・ハートの先端部の前方の空間にも、2つの環状魔法陣が魔砲バレル（砲身）として出現した。

その直後、レイジング・ハートの前方の空間に、なのはの魔力が半実体化した

スフィア（魔力砲台）が現れ、桜色に輝きだした。

なのはは、レイジング・ハートをライフル銃の様にかまえる。

愛機は、発射準備が完了した事を主に伝えた。あせ

「デイバイン・バスター・エクステンション！」

『デイバーーーン・バスター！！！！』

レイジング・ハートの先端部に形成されていたスフィア（魔力砲台）のまわりに更に小型のスフィアが3つ形成された直後、中央のスフィアがふくれ上がり、桜色の巨大な魔力砲弾となって標的へと直進する。

なのはの魔力砲弾の直撃を食らった、魔獣の一団は粉々になって吹き飛んだ。

砲撃の終了後、レイジング・ハートは先端部の排気ダクトを開いて、砲撃魔力の余剰分を排気した。

なのはに少しだけ遅れて、攻撃をしかけたのは、
なのはの親友、

フェイト・テストロッサ・ハラウンである。

フェイトの姿は、一見、飾り気のない、

黒色と間違えそうな濃い藍色の制服の上に

ただ白いマントを羽織っているようにも見える。

その外見は、トップモデルのような彼女の容姿と、

その美しい金髪のロングヘアーとも相まって

、フェイトを実年齢以上に大人の女性と錯覚させる。

だが、その服装も、彼女の愛機であるインテリジェント・デバイスが
フェイトだけのために構成したインパルス・フォームと言う名の
バリアジャケットである。

このフェイトのバリアジャケットは、

高速戦闘を主目的としながら、

防御力も高いバランスの良いフォームである。

また、隠しモードとして、

超高速モードが準備されているが、危険な物なので
現在、採用は見送られていた。

フェイトは、このバリアジャケットを構成し、

今も、ともにある愛機バルディッシュに

全幅の信頼を注いでいる。

バルディッシュの製作者は、魔法技術によって生み出された
リニスと言う名の『使い魔』である。

リニスはフェイトの母親プレシア・テストロッサの使い魔で、フェイトの育ての親であった。

使い魔の寿命は、例外もあるものの、極めて短い。

使い魔が生きている限り、製作者の魔力・生命力の一部を消費するので、通常は存在の条件を設定し、条件を満たせば、短期間でその一生を終えることになる。

リニスの生存期間については、諸説あり、当初2年以上は生きていたとする文献があったが、その後、約1年と7ヶ月だったと言うデータが発見されたりと、良く分かっていないが、それでも、3年は超えなかったと思われる。

リニスは、バルディッシュを創る際、自分がいなくなったら、自分の代わりにフェイトを支える杖となって欲しい、フェイトの前に困難が立ち塞がったら、ともに道を切り開く剣となって欲しい、と言う願いを込めた。

フェイトはバルディッシュに込められたこのリニスの思いを知っているがゆえに、いかなる強敵と相対しても、彼とともにあるならば、決して恐怖に屈する事などなかった。

フェイトは、右手に基本形態アサルトフォームのバルディッシュを握り、

数体の融合魔獣から適度な距離をとった。

彼女は左手を前方に出して、手のひらに何かを載せている様な姿勢をとる。

その後、右手のバルディッシュを体の後方に構え、魔力カートリッジを1発ロードする。

リボルバー式拳銃のようなバルディッシュのマガジンが高速で回転していた。

直後、フェイトの体の下に、金色のミッド式円形魔法陣が形成され、彼女の左手の上には、電光とともに、小型スフィア（魔力砲台）が現れる。

さらに彼女の左腕の周りには小型の、彼女の前方には大型の、金色に輝く環状魔法陣が形成された。

『プラズマ・スマッシュャー！！！！！！』

フェイトが、敵に向けて左腕を伸ばすと、彼女の左手の小型スフィアを中心に大型魔法陣が出現する。

その後、その大型魔法陣から、金色の巨大魔力砲が発射され、電光を伴って、フェイトに接近中だった魔獣数体を飲み込んだ。

その頃、離れたところで、呪文を詠唱中だった八神はやても、やっと攻撃魔法の発動準備ができたようだ。

『・・・撃ちつらぬけ！』

八神はやては、
三人組の中では一番魔法戦闘の経験が短い
が、複数の敵との戦闘では彼女の右に出る者はいない。

はやては、9歳の時『闇の書』と言う魔導書によって
その所有者に選ばれた。

その『闇の書』は暴走する破壊兵器であり、そのため、
はやてと、なのは達の『地球』は滅亡の危機に陥った。

それを防いだのが、なのはとフェイト、
時空管理局の面々、

そして『闇の書』の4人の守護者であった。

この事件の解決によって

『闇の書』は、本来の姿である、

健全な魔導書『夜天の書』に生まれ変わり、

はやても魔導師となって時空管理局に入ったのだ。

『闇の書』が『夜天の書』に変わる際、

『夜天の書』の管制プログラムであった

初代リインフォースは自分の内部プログラムに異常が有り、

このままでは、自分が暴走し、元の危険な状態になってしまつ事を
警告し、自分自身を、なのはとフェイトに破壊してもらったのであ
る。

はやての、所持するデバイス、

シュベルトクロイツはAIを搭載していない

非人格型アームドデバイス（武器タイプの魔導端末）であるが

初代リインフォースがはやてに残した物であり、
はやての大魔力を発射する砲身でもある。

はやてが着ている騎士甲冑は、
なのはと、フェイトのミッドチルダ式のバリアジャケットとは
意匠が異なる。

これは、はやてが『夜天の書』の主^{あるじ}
であり古代ベルカ式魔法の使い手であることが要因である。

はやての騎士甲冑はベルカ式のバリアジャケットと呼ぶべきもので
鎧と戦闘服をミックスした様な外見である。

黒い部分と濃い藍色、腕部が白、他にも白と金色のアクセント、
腰と襟の部分に金色のアーマーがついていて、
さらに白い帽子と、古代の神官の様な気品が漂う。

さらに背中から六枚の黒い翼が出ているが
これは魔力が半実体化したもののようだ。

はやては、手にしたシュベルトクロイツを横に振る。

すると、彼女の足元に、白銀の3角形をしたベルカ式魔法陣が出現
した。

ほぼ同時に敵の近くの空間にも、ベルカ式魔法陣が形成される。

その敵近くの魔法陣の中央と周囲に
7つのスフィア（魔力砲台）が現れた。

『石化の槍！ ミストルティン！！』

『魔導師って？あたいら、魔法少女なんだが。』

『魔法少女?!』

なのはが、やや意味不明な反応を返してくる。

『うわー、なつかしい、私も小さい頃はそう呼ばれてたんだー。』

なのはは、そう言うと杏子に急接近して、その手を握る。

そして握手をした状態で杏子の手をブンブン上下に振る。

『私、高町なのは、よろしくねー!!。』

杏子をつかまえ、人懐こい笑顔で、そう言うのは。

『え、あ、あー、よ、よ、よろしくー。』

なのはの異様な迫力に押されながら、そう答える杏子。

(なんだ、こいつは?)

杏子は心の中で思った。

彼女は、何度もほむらの冷静かつ正確な状況判断に助けられている。

そのほむらが、敵ではなさそうだと、と言っているのだから、警戒する必要はないはずだ。

(しかし、こいつの持つ異様なプレッシャーはいつたいなんなんだ。ひょっとして、こいつ、ものすごく強いのか?)

このままでは、話がぜんぜん進まないと、判断したのか、ほむらが会話にまじる。

『まあ、名称なんてどっちでも良いのではなくて。

魔導師と言うのは、おそらく、

魔法を実用レベルで運用できる人の事じゃないのかしら。』

『まあ、ほぼ正解や。』

状況を見ていたはやてが答える。

『あの、それで、あなた達はいつたい?』

そこで、ようやく、まず最初にするべき質問をマミが口にした。

『ああ、ごめんなさいね、実はわたし達は . . .』

フェイト達は、ほむら達に自分の身分を明かし、

ロストログア回収とこの宇宙の平和維持のため、協力を求め、ほむら達も快くそれに応ずる。

時空管理局から見た、マギカ宇宙について、解説。

以前より時空管理局サイドから、マギカ宇宙は特殊な宇宙として観測されていた。

何度か考えられない程の巨大な魔力反応が検知されたが、隣接する他の宇宙にその影響が及ぶことは無く、直接マギカ宇宙に侵入して現地調査する事も検討されたが、正体不明のバリアーらしきものがこの宇宙をとりまいていたため、外部からこの宇宙に侵入することは不可能であった。

それが数年前、この宇宙を発生源とする巨大な次元震が発生し、これも隣接する宇宙に影響は無かったものの、それ以後はこの宇宙の周りの、正体不明のバリアーが消滅している事が判明し、管理局上層部では、あらためてこの宇宙の現地調査をする事が検討されはじめていた。

なお、管理局内部で、マギカ宇宙と言う名称が使われていた訳ではない。

第4章 ウチ、そんなん、嫌や

なのはや、ほむらの目前で、倒したはずの魔獣が再生していく。

いや、それだけでなく、サイコクリスタルの中央の石に目が生じ、その自意識が魔獣の体を支配して、その魔力はさらに強大なものになっていく。

彼らが仲間を呼んだのか、空間を裂いて新たな融合魔獣の大群も現れ、魔法少女達にせまる。

その光景にマミが思わず、悲鳴をあげる。

『う、うそでしょ！ 一度倒した魔獣が再生するなんて!!』

それだけではなかった。最初に変化に気がついたのは、ほむらだった。

『みんな、気をつけて！』

魔獣の炎熱系魔力弾の色が赤から青に変化してるわ。

高温になった証拠よ。』

杏子も敵の変化に気づいたようだ。

『それに魔力弾の連射速度も上がってるみてえだな。

困まれたら、やべえぞ。』

『どんな強力な魔力弾でも当たらなければ、

『どーと言う事はないわ!』

はやてが、どっかの赤い人みたいな事を言いながら、敵に攻撃をしかけた。

『ブリユーナク・アサルト!』

はやての、シュベルトクロイツのほぼ中央部から4本の青白く光る短剣型魔法弾が撃ち出され、魔獣に突き刺さる。

だが、ダメージが不十分で、魔獣を倒すにはいたらなかった。

当然、敵ははやてを狙って青い高温火炎弾を撃ってくる。

『だから、当たらなければ・・・』

グググッ!

『はやて!』

『うわ?!』

ズドーン!!!

『あちゃちゃちゃちゃー!』

魔獣の青い魔力弾がはやてを狙ってホーミング（自動追尾）したのだ。

幸い、フェイトが声をかけたおかげで、はやては古代ベルカ式のシールド系防御魔法パンツァーシルトを展開し、すんでのところ、魔力弾を防御したので、大事には至らなかったようだ。

もつとも、防御のタイミングが少し遅かったのはやては、その手にすこしやけどを負ったのだが、これも、彼女の騎士甲冑の高い防御性能のおかげで、軽症のレベルだった。

はやては、治癒魔法で自分のやけどを治しながら、戦友たちに警告する。

『うー、結構、知恵も付いたようやし、みんな、注意が必要や。』

これには、なのはも同意する。

『うん。』

『お、おい！』

あ、あれ！！！！』

魔獣たちの更なる異変に気づいた杏子が声をあげる。

魔獣たちの頭部、人間で言えば額にあたる部位にクリスタルが有るのだが、

そのクリスタルの前方の空間に光の円盤が出現している。

その光の円盤は、魔法陣ではなく

中心に光の渦の様な模様があり、
光の渦が回転するたびに円盤の全体が大きくなり、
光も強くなっているようだ。

杏子が率直な意見を述べた。

『な、なあ。』

すんごく、いやな予感がするんだが。』

ほむらが、答える。

『奇遇ね、私もそんな気がするわ。』

『だったら。』

『みんな、散れ——————!!!!!!!!!!!!!!』

ブアアアアア!!!!!!!!!!!!!!

魔獣たちの頭部クリスタルの前方に形成されていた光の円盤から、
ぶつといレーザー・ビームにしか見えない、怪光線が発射され、
その光線が着弾した地面は融解していく。

しかも、光線は結界内に存在する物体も、たやすく貫通していた。

『なんや、あれは?! 魔力砲撃なんか?!』

『わからないけど、とにかく、あれは直撃したらまずいね。』

全員が、この、なのはの意見には、激しく賛成だった。

直撃したら、どうなるかなんて、誰も想像しなくなかった。

『ざけんなよ！』

連射ホーミング弾に、貫通レーザーだと！！

シューティング・ゲームのハード・モードのつもりかよ！！！！』

思わず杏子は悪態をついた。

この魔獣は、ひよっとして、

シューティング・ゲーム好きの、コアなゲーオタの意識を

取り込んでいるんじゃないかと、

たまにゲーセンで遊んでいる杏子は本気で思った。

杏子には、魔獣たちが

『XXXXXXXXXビィーーム！！！！』

とか言っているような、幻聴が聞こえる気までしてきた。

なのはは、魔獣たちの様子を冷静に分析して意見を述べる。

『やっぱりそうだ。』

クリスタル状のロストロギアが、あのモンスターに影響を与えているんだ。』

『それに、さっきまで魔獣がああクリスタルの魔力を利用していたのが、』

今はクリスタルの方が自分の意識を持って、

魔獣の体をコントロールしているように感じるわ。』

ほむらも、魔獣たちとロストロギアの関係性には気がついていたよ
うだ。

そして、杏子が結論にたどりつく。

『ちょっと待て!!もしそうなら。』

そのロストなんたらが中枢だつて言うならっ!!』

キラリッッ!!!!

杏子の瞳が凶暴な色に染まる。

『話は、早ええ!!』

ヒュンン!!!!!!

一瞬で杏子の姿は視界から消える。

次の瞬間、杏子は一体の融合魔獣の眼前に高速移動していた。

そして、

バシュッッ!! ガツシャー!!!!

杏子が使っている一本の長い槍タイプの武器が、

『多節槍』と呼ばれる蛇腹状の武装に変形する。

杏子はその武装を器用に使いこなし、

融合魔獣の頭部、人間で言えば額の部分にある

ロストロギア・サイコクリスタルを粉々に粉碎した。

『ほほー、やるもんやな。』

『うん、なかなか器用だ。』

それに、本気になったフェイトちゃんほどじゃないとしても、スピードもかなりのものだよ。』

杏子の戦闘技術に感心するのは達。

『なら、私も!』

マミは、彼女の服の胸元を飾っているオレンジ色のリボンを引き抜くと、

それを、新体操のある種の技の様に、空中でクルクルと回転させた。

すると、リボンは大砲の様に巨大な銃の形にいきなり変形した。

『な?!?!』

『ティロ・ファイナーレ!!!』

バオオオ!!!

マミの巨大な銃から発射された、

やはり巨大な火線はクリスタルごと魔獣の頭部を吹き飛ばした。

『な、なんや、あれは?!?!』

なんで、リボンが、巨大な大砲にいきなし変化すんねん!!!!!!

まるで、どこぞの、イリユージョンや!!!!!!』

はやては、まるで、初めてマジック・ショーを見た小さな子供の様に興奮している。

『なんと言うか、あれはまるで、私たちが実際の魔法に出会う前に、マンガやゲーム等から空想していた、いわゆる魔法のイメージだね。』

『なんだか、ちょっと、うらやましい気がする。』

だが、なのはの感想に、ほむらは反論する。

『良いモノじゃないわよ、魔法少女なんて。』

ほむらは、魔法の弓を出現させ、魔力を実体化させた光の矢を発射した。

発射された光の矢は空中で何本かに拡散すると、数体の融合魔獣のクリスタルを撃ちくだった。

だが、

ブ、ブーン!!!

『げ!!!』

杏子の目の前に、たった今、3人が倒した魔獣の約2割増しの数の融合魔獣が空間転移で現れた。

『よっしゃ、ここはウチの出番や!』

『は、はやて!』

『何をするつもり?!』

いやな予感のしたフェイトは、速攻で、はやてに確認する。

『何をするて、そんなん、決まっとるやん。』

『ここは、ウチの得意の広域攻撃魔法で、』

『あのモンスターども、全部きれいにぶっとばしたるわ!!』』

『わたし達ごと?』』

『はい?』』

『状況を良く見て、はやて。』

『ここは、あのモンスターたちが魔法で作り出した特殊結界の中。』

『そしてこの場所はかなり狭い閉鎖空間になっているわ。』

『こんな所で、はやてが強力な広域攻撃魔法を使ったら、』

『モンスターたちだけでなく、わたし達まで黒コゲどころじゃすまないわ。』』

『さすがは、三人組の中では一番魔法戦闘のキャリアが長いフェイトである。』

『状況を冷静かつ的確に分析している。』

『ほ、ほんなら、ウチもなのはちゃんと同様に、遠距離攻撃魔法で。』

『それもダメだよ、はやてちゃん。』』

『な、なのはちゃん、そ、それはいつたい?』』

『はやてちゃんの遠距離攻撃魔法って、たとえ、』

『ラインちゃんとユニゾン中であっても、魔法力のコントロールが』

へたとまでは言わないまでもまだまだ制御が甘いから、その命中率は、

いまだ50パーセントを超えていないよね。

それっていわゆる魔力のムダ使いって言わない？」

『うう。』

そう、はやては、魔力の最大出力は、やたらとでかかったが、細かい魔法力の制御が苦手であり、その得意分野はあくまで広域攻撃魔法であった。

また、フェイトの得意分野は敵に接近しての高速戦闘、なのはの得意分野は敵から距離をとってから防御を固めての高威力射撃魔法と、

この三人は得意分野がてんでバラバラで、各人の能力の個性がはっきりしていた。

だからこそ時空管理局の中では、この三人は、いかなる状況にも対応可能なベストのチームと言われている。

中には、三人揃えば、『世界のひとつやふたつ』軽々と救ってみせてくれそうだが、とまで評価する者もいたが、いかんせん、いまだ経験が少々不足していた。

特に、はやては、である。

この主な原因は、彼女が三人の中では魔導師となったのが一番最後だったと言う経歴のためもあったが、

その後、彼女が魔導師としての実戦経験をつむ前に、彼女の優秀かつ強力すぎる固有戦力の、守護騎士ヴォルケンリッターと呼ばれる部下達が敵をあつと言うまに全滅させてしまつからで、ある意味過保護にされているとも言えた。

もつとも、友人である高町なのはは、本人のためを思つて場合によつては、かなり厳しく接しているようだ。

『味方を巻き込むような状況での攻撃魔法の使用、ムダと分かっているような魔力の使い方などは、プロの魔導師のやる事ではない、と何度も本局の教官に注意されてたよね。』

『ほ、ほんなら、ウチが今やるべき事は？』

『あの子たちを含めた味方が負傷した場合の治療魔法、それに味方全員のための防御魔法の展開！！
これだね！』

『わたしも、なのはと同意見。』

『ウ、ウソや。』

『ウソや言うてや、なのはちゃん！！』

『.....』

『フェイトちゃん！！』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『や、やっぱ、このままじゃあかんのか?!』

山ごもりして、秘密特訓やりまくって、

ミストルティンの上級技と言われとるミストルティン・キックを
会得し、

どごその異世界でやさしいゾンビ様と

運命の出会いをせな、あかんのかあ?!?!』

『マ、マイスター、はやて!!』

お気を確かに!!』

はやての、明らかに異常な様子に、

はやてと、ユニゾン（融合）している、

彼女専用の人格型ユニゾン・デバイス（融合騎）である
2代目リインが心配して、声をかけた。

『そんなん、嫌や。』

『リイン』

『ウチ、そんなん、嫌や・・・』

『そんなん、イヤやーーーーっ　!!!!!!!!!!』

嘆きの、叫び声をあげる、はやて。

もはや、どっか別の作品の、別のキャラの様である。
わけが、分からないよ。

それから、たちの悪い、イタチごっこが始まった。

フェイトと杏子が接近戦で健闘し、ほむらとマミが射撃で援護するものの、

敵を減らすと、減らした以上の数の敵が空間転移で増大し、を繰り返す、

魔法少女達はぎりぎり魔力を削られていく。

（ 戦況について、解説。

ヴォルケンリッターは別任務のために参戦できず。

なのはも、墜落事件の後遺症が完治していないので、本来の実力が出せません。

今のなのはは、全力の約60パーセントといった戦闘力でしょうか。さらに、今回の戦闘は狭い特殊結界の中での接近戦と中距離戦がメインのため、

はやて得意の広域攻撃魔法も味方を巻き込む危険があります。

そのため、はやては、今回ほぼバリアーの係り、残念。 ）

予想以上に苦戦中の、なのはの額を、いやな汗が流れ落ちた。

『失敗だったかな、完全に想定外だったね。』

いろいろ文句を言いながらも、自分のやるべき事を必死にやっているはやてが、なのはに答える。

『そうやな、今回こないな強敵と遭遇するなんて誰も思ってなかったやんか。』

そうなのだ。もともと今回の任務は『停止状態のロストロギア』の

回収と、

この未確認の宇宙の現地調査のはずだった。

そのため、はやての忠実な部下であり、強力な魔導騎士団であるヴォルケンリッターも同行しておらず、また魔導師の魔力消費をセーブし、さらに魔力を増幅して使う事が可能な

『カートリッジ』も、たいした分量は携帯していない。

さらに、2年ほど前の墜落事件で負傷し、その後遺症が完全には治っていないため、決して戦えないわけではないが、100パーセントの戦闘力を発揮できない状態の、高町なのはがこの任務に出動しているのも、同じ理由だった。

これは管理局上層部の完全な判断ミスだった。俗に言う、たかを、くくっていた、と言うヤツだ。

しかし、そんな事をくやんでいる場合ではなかった。

『状況は最悪。それでも、なんとかしないとね。』

『だね。』

なのはのとなりで、最高の友達が勇気づけるように答える。

『じゃ、行こうか、フェイトちゃん。』

『了解、なのは。』

二人は、魔力反応の大きさによって、

敵の中心にリーダー格らしき魔獣を発見していたが、まだ距離があり、直接叩くのは難しかった。

そこで、自分達がまず陽動をしかけ、その隙に、仲間たちに、邪魔な敵の一群を掃討してもらおうと考えた。

魔獣たちは、目の前の獲物を同じ結界内に閉じ込め続けると言う戦術ぐらいしか考えていない。

もつとも、それゆえ、なのは達が破った結界の出入り口はすでに閉じられていた。

だから、魔獣たちはどうみても、たいして知能が高いとは思えなかった。

そんな敵でも、なのはが長距離攻撃を行い、そのすきにフェイトが接近戦をしかけると言うパターンぐらいは、学習したようである。

だからこそ、今度は、逆パターンをしかける事にしたのだ。

先行したフェイトが中距離からいきなり、射撃魔法を使用する。

『いくよ、バルディッシュ！！』

「イエッサー！」

バルディッシュのリボルバー型弾倉が回転し、カートリッジを2発ロードする。

『プラズマ・バレット！！』

それは、あのやばいレーザービーム発射体勢だった。

その時、特殊結界の上部に光の渦が出現し、そこから、まどかとさやかが、まい降りる。

初代リインフォースから、

一時的に魔法少女として実体化するための魔力エネルギーをもらった、

そのあかしとして二人の背中からは初代リインフォースの黒い翼が出ている。

（この黒い翼は時間と共に消えて短くなっていき、完全に全部が消滅すると実体化も解けてしまいます。気をつけて。）

『分かってるよ、リインさん。』

まどかと、さやかは、初代リインフォースに言われた事を思い出しながら、

魔法攻撃の準備をすばやく行った。

二人の魔法戦闘用の装備は、初代リインフォースによって強化され追加効果などが付与されていた。

まどかは、先端にピンクの花を付けた

木製にも見える魔法の杖を天にかかげた。

魔法の杖は、見る間に魔法の弓の形態に変化していく。

まどかは、その魔法の弓を引き絞り、弓に魔力を込める。

すると、弓の上部に桜色の炎が出現し、
まどかの足元にはピンク色のベルカ式魔法陣が形成される。

そして弓の上部の炎が大きく燃え上がると、
白銀の光の矢が現れ、矢の先端部には桜色の魔力球が形成されてい
く。

まどかが、矢を放つと、矢は空中で炸裂して、
桜色の無数のレーザー光線の様な光となって、
魔獣たちを貫き、彼らの体を消滅させた。

まどかは、さらに魔法の矢を高速で連射して、つぎつぎと魔獣を消
しきっていく。

さやかは、魔獣たちに突進しながら、その両手に2本の魔力剣を実
体化させた。

『いつくぞー!』

さやかが2本の魔力剣に魔力をこめると、その剣は青く輝き始め、
彼女の足元に、青いベルカ式魔法陣が出現する。

『ソニック・スラッシャー!!!』

さやかが2本の魔力剣を振り回すと、その剣から、
銀色の剣圧と、青い魔力弾の両方が、高速で連射され、
魔獣たちを切り刻んだ。

『つりやりやりやりやー!!!!!!!!!』

さやかと、まどかの連続攻撃が、融合魔獣たちの軍団を切り崩していく。

新たに現れた敵の猛攻に、リーダー格らしき融合魔獣が思わず、人の言葉で問いを発する。

『 . . . ナ カ マ カ ? . . . 』

魔獣の問いかけに、返事を返す、まどかと、さやか。

『 ともだち だっ!!! 』

ほむらと杏子はほぼ同時に声をあげる。

『 まどかア!!! 』

『 さやかア!!! 』

パキイン、と、記憶のカギが叩き壊されるような感覚の中でママもまどか、と言う名の魔法少女が誰だったのか思い出していた。

『 私、どうして忘れていたのかしら。』

鹿目さんは、私にとっても大切な人だったはずなのに。』

杏子も、ママほどすぐにはなかったが、まどかの事を思い出したようだ。

『 そうだな。なんでだろうな。』

大切な仲間、じゃねえ、大事な友達を忘れてたなんて。』

ほむら達は生き返ったように闘志を燃え上がらせ、それにチカラを分けてもらったように、なのは達も反撃を開始する。

融合魔獣達は、

まどかと、さやかの二人に反撃しようとしたところを、反対方向から、ほむら達と、なのは達の攻撃をまともにくらったため、またたく間に、その数を減らした。

そして最後まで残っていたリーダー格の融合魔獣と大型融合魔獣数が、あわてるように空間転移で逃げ去り、周囲は、今までの激闘がうそのように静けさに包まれた。

『まどかアー!』

ほむらが、まどかに抱きついて泣きじゃくる。

『さやかアー!』

杏子が、さやかに抱きついて泣きじゃくる。

もう、ほむらも、杏子もその顔は、涙と鼻水でぐっちやくぐちやくである。

まどかと、さやかは、泣いているのと、笑っているのが半々で良くわからない表情になっている。

そんな、少女達をなのは達は黙って見守っていた。

ふと、はやてとユニゾン（融合）中の2代目リインがはやてに話しかける。

『マイスターはやて、

新しく加わったお二人のあの背中の翼、あれはもしかして。』

『ああ、リインも気づいたか、あれは初代リインの魔力がこもってるな。

二人に実体化する魔力を分け与えたんやね。』

『でも、どうして。

どうやって魔力を蓄積したのかは、わからないですが、あれだけの魔力があれば自分が実体化して

マイスターはやてに会いに来る事もできたんじゃない。』

『友達を助けに行きたかったあの二人をほっとけなかったんやね。

あの子はやさしい子やから。』

そう答えるはやての横顔は、寂しそうでもあり、また、誇らしげでもある。

第5章 力を貸して

高町なのはは、敵影が、もうないのに、
結界が崩壊していない事に
気がついていた。

『敵は、もう、ここにいないのに、捕獲結界はそのままだね。』

『つまり、まだ、敵の襲撃があるとみた方がいいよね。』

『うん。』

なのはと、フェイトの予想は当たっていた。

静かだったその場を全て破壊するのが望みのような轟音と共に、
一つに集合し溶け合った巨大融合魔獣が空間から出現する。

さやかが、もううんざりだ、と言う声をあげた。

『まったくもう、しょうこりも無く。空気読めっつーの!』

『ユルサヌ、許さぬぞ! ナニが友達だ! !何がナカマだ! !』

平気で人はヒトを裏切る。平気で人はヒトをだます。

平気で人は他人の大切な夢や、理想を簡単に叩き潰す。

許すものか、ユルスモノカ、

にくい、ニクイ、憎い、にくい! ! ! ! ! がああああ! ! ! ! !』

巨大融合魔獣が人の声で、怨嗟の叫びと、憎しみを吐き出す。

そして強力な魔力と共に闇の波動の嵐が少女たちに襲いかかった。

『こ、この気持ちは！そうか、あなたは、
あなた達は夢を、理想を壊された人たちの、
絶望の中で生まれた悲しみそのものだったんだね。
だから人を憎む事しかできなかったんだね。』

『まどか！』

『鹿目さん！』

『くっ！！』

『こんのー！！』

魔法少女達は使用可能な遠距離攻撃を繰り出すが、
巨大融合魔獣の防御シールドはびくともしない。

逆に、まるで巨大竜巻の様な、破壊的な魔力と闇の波動の暴風に翻
弄される。

『こ、この防御力に、攻撃力、そしてこの信じられないような魔力！
こいつは、あのワルプルギスの夜以上の敵かもしれない。』

それでも、ほむらの心が絶望に染まらないのは、
最高の友達が、そして大切な仲間がともにいるからだろう。

合計8人の少女たちは、結界内にかろうじて残った壁のような地形
の裏側に
、陣取り、敵の攻撃からなんとか身を守っていた。

杏子はある事を思い出し、心に生じた疑問をまどかにぶつける。

『そういえば、まどか、ほむらの説明によれば、

あんた、宇宙最強の魔法少女なんだろ。

なんとか、ならないのかよ。』

実際、鹿目まどかは、杏子たちの宇宙が変革された日、文字通り、宇宙最強の魔法少女となったはずだった。

しかし、それは一日限定の強さだった事を知る者は、まどか本人と、さやかの二人だけのはずである。

『そ、それは．．』

『恐らく、無理だわ。』

まどかの気持ちを代弁したのは、ほむらである。

『ここにいるまどかは、恐らくは100パーセントのまどかじゃないのよ。』

『は？ どう言っことだよ、それ。』

『さすがは、ほむらちゃん。

全部お見通しだね。』

ほむらの考察を肯定するまどか。

『私は、あの日、全ての宇宙に存在する、全ての魔女を、

この手で消し去りたいと、願ったの。
だから、私のほとんどの、魔力と存在力の部分は、いまだ、
いろんな宇宙に行つて魔女と戦っているの。』

『だから、100パーセントのまどかじゃない、と言つことなの。
』
ほむらが、まどかの説明をフォローする。

『私と、さやかちゃんが、ここに来れたのも、
リインフォース、と言う人が魔力を
たくさん分けてくれたからなの。』

『やはり、そうやったか。』

はやてが、『リインフォース』の名前に反応して、
会話に加わる。

『うん、リインさんに頼まれたんだ。
八神はやてさんと、その友達にも力を貸してあげて欲しいって。
だから。』

まどかの中には何か、決意が出来ているらしい。

『しかし、このままじゃ、あかんな。
なんとか、突破口をひらかな。』

そんな中、なのはは収束砲を使おうとするが、
やはりケガの後遺症のためか、魔力収束が思うように出来ない。

『なのはさん、わたしが、力を貸してあげる。』

だから、お願い、皆も私に力を貸して。』

まどかは、レイジングハートを握る、なのはの手の上に自分の手を重ね、

さらに自分の魔法の弓をレイジングハートに重ねあわせる。

すると魔法の弓とレイジングハートは一つに融合し
巨大なボウガンのような形状となった。

そして、まどかは、目をつぶり何かを祈るような表情になっていく。

その祈りが形になったように、

まどかの背中の黒い翼が、白く輝き、さらに巨大化していく。

『まどかさん?!こ、これって?!?!』

驚く、なのは。

だが事情をわかっているらしいさやかが、あわて始める。

『ちよ、ちよっと、まどか!!!』

そんなに魔力を全開したらせつかくりインさんにもらった
実体化のための魔力がすぐなくなっちゃわよ。

まどかは、それでいいの?』

『分かってるよ、さやかちゃん。』

でも友達を守るためだから。ふるさとを守るためだから。

そして、夢を失った人たちの、

憎しみも、悲しみも、すべてを受け止めたいから。

それは、たぶん、わたしにしか、出来ない事だから。』

『ならしかたねえ、サポートはばっちりしてやらァ!』

『しょうがないや、あたしもつきあつよ、まどか。』

杏子とさやか、そして他の皆も強くうなづく。

魔法少女達は気持ちをひとつにしていく。ひとつの光に変えていく。

皆の魔力だけでなく、皆の祈りの光までが、力強い流れとなり、

まどかの背中の、美しい白銀の翼を通して、

ポウガンの形に変形したレイジングハートに集中していく。

少女達が声を揃えて詠唱する。

『希望の祈りよ、今こそ光の星屑となりて、闇を、打ち、くだけ

ー!!!』

『スターダスト・デストロイヤー!!!!!!』

カツ!!!!!!

一瞬あまりの強烈な光で、何も見えなくなる。

この閃光を見たほむらは、一瞬、あの日を思い出していた。

それは、なにか、デジャブな感覚と言えた。

白き閃光と共に、大型ポウガンから桜色の巨大な光の矢が放たれる。

それとほぼ同時に、それを迎撃するかのように、

『わかったぜ!』

『さやかに、おまかせだよ!』

『分かりました!』

全員の無事を祈りながら、なのはは、みんなに声をかける。

『うん、それじゃ、みんなで、

この戦いに決着をつけよう!』

『『『了解!!!!!!!』』』

接近戦の担当3人がいきおい良く、飛び出していった。

フェイトは逃げた魔獣の一体を追う。

『バルディッシュ!』

〔ザンバー・フォーム!〕

長剣タイプに変形したバルディッシュに、
ビーム・ブレードのような金色の魔力刀が形成された。

フェイトは、ザンバー・フォームのバルディッシュを
両手で持つてかまえる。

すると、彼女の足元に、金色のミッド式魔法陣が出現した。

バルディッシュユが3発の魔力カートリッジをロードするのを確認したフェイトは、技のモーションに入る。

彼女は美しいフォームで横に1回転すると、バルディッシュユから、敵に向けて、捕縛魔法を撃ちだした。

その捕縛魔法に包み込まれた魔獣は、激しく、もがくが、まったく身動きが取れない。

フェイトは、バルディッシュユを天にかかげ、電撃をその刀身に付加する。

『 撃ち抜け!!! 』

雷神!!!!!! 』

〔ジェット・ザンバー!〕

斬!!!!!!

フェイトは、『二人』の闘志が一本となった電刀を、振り下ろし、魔獣を、真つ二つに両断した。

『んあー!』

こ、こいつー!!!』

杏子も、残った魔獣の一体を追撃していたが、この魔獣が例のホーミング魔力弾をやたらと

連射してくるので、なかなか距離をつめられないでいた。

魔獣も、生き残りたいという、本能のような物があるのか、必死だったのだ。

『しかたねえ！』

まだ、練習中の技だが、
使ってみるか!!』

杏子が魔法少女として、本来持っていたチカラは、
実は、眩惑魔法や幻覚魔法のたくいである。

だが、彼女は、過去のあるトラウマによって
そのチカラを無意識に封じ込めていた。

しかし、今の杏子には、

大切な友人がいる、

大事な仲間たちがいる。

もう何も、怖くなかった。

『いくぜっ！』

眩惑魔法！

ファントム・ストリーム!!』

杏子の周りに、7つの宝石の様な形の、赤い魔力光が出現した。

そして、強烈な光とともに、7つの魔力光をコアにして、
7人の杏子の分身が現れる。

『どうだ！』

7人の杏子だぜ！！』

7人の杏子が、魔獣に突進していく。

さらに、7人の杏子が、2重分身、3重分身！！

気がつけば、21人の杏子が魔獣を包囲していた。

『くらいな！！』

赤い閃光！！！！

レッド・バロン・スマツーシュー！！！！！！』

21人の杏子が、その槍と一体化して、

巨大な赤い光弾となって魔獣を斬り刻んだ。

『くっ！』

さすがに、魔力と体力を使い過ぎたか。』

歴戦の魔法少女である杏子も連戦で魔力も体力も限界に来ていた。

『敵はまだ、数体いたはずだが、

みんなは無事なのか？！』

む？

そ、そういえば、さやか！！

あいつ、どこ行ったんだ？？！！』

杏子は敵の追撃に、夢中になるあまり、

大切な人物を見失っていた事に気づいて、
あたりを見回した。

『さやか!!!!!』

どこだ?! さやか!!!!!』

いたら、返事しろ!!!!!』

『そんな、大声出さなくても、
聞こえてるって。』

『さやか?!!!』

見れば、さやかは結界のほぼ中央で仁王立ちしている。

その、さやかを指して、一体の魔獣が、
まるでやけをおこしたような勢いで、
猛突進してくるではないか。

思わず、杏子は、悲鳴に似た大声を出してしまう。

『あ、あぶねえ!!!!!』

さやか!!!!!』

逃げろ!!!!!』

さやか!!!!!』

おい!!!!!!!』

聞こえねえのか?!!!!!』

さやか!!!!!!!』

さやか?!?!!!!!』

『大丈夫だよ、杏子。』

こいつは、あたしが、かたづけろ。』

『さやか?!』

『ねえ、杏子。』

あたしね、全部覚えてるんだ、

あんたが、あたしに、言ってくれた、

大切な、大切な、あたたかい言葉を。』

『さやか……』

『あたいが、いつしよにいてやるよ、って。』

せつかく友達になれたのに、って。』

『こ、このバカ……』

へ、変な、事ばかり、

ちゃんと覚えてんじゃねえよ……』

杏子は、顔を少し赤くしているようだ。

『うん、あたしって、』

本当にバカだからさ、

うまい言葉が見つからないんだけど……

ありがとう、杏子。』

『……っ!』

『杏子はさ、こんな、あたしのために、
傷だらけになっても、一生懸命で。』

命をかけて、あたしを助けようとしてくれた……………

……………

あたし、すごく、うれしかったんだ。』

『……………』

『ね、杏子。』

今でもさ、

友達だよね、あたし達？』

『たりめーだろ!!!』

『だったら、見てて。』

これが、あたしの、

全力全開だああああ!!!!!!!!!

さやかが2本の魔力剣に魔力を込めると、

その剣は青い光を放ちながら、長く伸びて

さらには巨大化していく。

それに、つれてさやかの、

背中の黒い翼がみるみる短くなっていった。

さやかは、それにとくに気づいているが、

かまわず魔力剣に魔力を込め、

最終的には25メートルを超える

でも、かつこよかったぜ、さやか。
惚れ直した!!」

「な、ななな、何言ってるの、杏子。」

今度は、さやかが、赤くなる番だった。

「あー、そう言えば、あたいも、もうだめ。
もう、体が動かんわ。」

二人は寄り添って、地面に座り込んだ。

「でも、大丈夫だよ、杏子。」

みんなにまかせとけば。」

「だな。」

みんな、頼んだぜ!」

後は、リーダー格の融合魔獣が残っているだけだった。

なのはは、融合魔獣の頭部に有る
サイコクリスタルに狙いをつけた。

会話もなしに、なのはの意思が分かるのか、
レイジング・ハートは、
マガジンから1発の魔力カートリッジをロードした。

「レイジング・ハート!

エクセリオン・モード・ドライブ!」

「イグニッション！」

レイジング・ハートを、多数の環状魔法陣が取り巻き、
レイジング・ハートは、槍状の高速突撃形態
エクセリオン・モードへ変形する。

そして、なのはの足元に、桜色のミッド式魔法陣が展開された。

なのはは、レイジング・ハートを天にかかげる。

「ロード・カートリッジ！」

4発の魔力カートリッジがロードされた。

同時に、レイジング・ハートのヘッド部に、
反動吸収用のブレーキ・ウイングが形成される。

なのはは、最後の融合魔獣へ、
レイジング・ハートを向けた。

『エクセリオン・バスター!!!』

「バレル・ショット！」

レイジング・ハートの先の空間が歪み、
はつきりとは目視出来ない衝撃波の様な魔力弾が
融合魔獣に命中する。

すると魔力弾が魔獣の体を空間に固定し、
魔獣は全く動けなくなった。

ゴオオオオオオ！！！

『又オオオオオオーーーー！！！！！！』

直撃をくらったリーダー格の融合魔獣は、
断末魔の叫びとともに、
チリも残さず消滅していった。

第6章 さよなら、はもう言わないよ

『短い間だったけど、』

今日は、みんなと一緒に、本当にチカラを合わせて戦うことができて良かった。

すごく、うれしかった。』

まどかは、みんなを見まわして、静かに言った。

『それに、新しい友達もたくさん出来たし。』

高町なのはが、まどかに近づき、改めて自己紹介する。

『私、高町なのは。』

なのは、だよ。』

『なのは。』

『うん、そう。』

『私、鹿目まどか。』

まどかつて、呼んで。』

『まどかちゃん。』

『うん。』

まっている。

『じゃあな、さやか!』

向こうへ行っても元気だな!』!』

『うん!』ありがと杏子。』

二人はそう言葉を交わすと、互いにニカッ!と笑つと互いのコブシとコブシをゴンツ!と、ぶつけあう。

『ほむらちゃん、それにみんな、元気でね。』

『まどかア。』

ほむらはもうほとんど泣き顔である。

『いつかまた 会えるから。大丈夫、信じようよ、だって魔法少女はさ』

『夢と、希望をかなえる?』

『そうだよ、だから、さよなら、はもう言わないよ。』

『またね、ほむらちゃん。』

まどか、と、さやかはゆっくりと空間に溶け込むように消えていった。

すべてが、まるで短い夢だったかのように、思い出だけを残して。

第7章 良いんじゃねえか

『ロストロギア事変』が終結し、
そして、まどか、と、さやかの二人が、『向こう側』に帰ってから、
約2ヶ月が過ぎていた。

現在、深夜の午前3時すぎ、
場所は見滝原の中心部から見てやや南西の郊外、
そこには魔獣の魔力反応を探索する3人の魔法少女の姿があった。

マミが杏子に尋ねる。

『佐倉さん、そっちはどうでしたか？』

『やっぱ、ぜんぜん反応ないわ。
魔獣の魔の字も感じねえ。』

二人に、ほむらも同じ報告をする。

『こちらも、全く同じね。魔獣の魔力反応無し。』

『やはりキュウベエの推測通り、
この前の、なんて言いましたっけ？
ロストロギアがこの近辺の人間の負の感情エネルギーを、
根こそぎ集めて吸収してしまったと言うことかしら？』

マミの疑問に、ほむらが、答える。

『ごうも、長期にわたって魔獣の出現が見られない、

と言う事はそう考えるしかないでしょう。』

『大掃除あとの、ピッカピッカの、きれいな部屋、
みたいなもんか。』

そう。前回、『ロストロギア事変』があつてから
ここ見滝原では現在に至るまで、
魔獣の出現がピタリと止まってしまっているのだ。

それは、マミの言葉にあるように、キュウベエの推測によれば
魔獣の発生源と言える人間の負の感情エネルギーが
サイコクリスタルと呼ばれるロストロギアの作用によつて
吸収、集積されてしまったというのだ。

キュウベエの言葉を信じるならば、この見滝原では少なくとも、
あと半年程度は魔獣が出現しないだろうとのことだ。

これでは、魔法少女のチカラも宝の持ち腐れである。

『では、やはり以前話が出ていた通り、他の町で苦戦中の新人さん
達の、

援護および教育をしに行く事を、そろそろ考えた方がいいかも知
れませんか。』

『ええ、私からマホ連に連絡を取って、いつ頃、どの町に行くのが、
一番良いか、確認をしてみるわ。』

巴さんは、引き続きこの町の状況確認をお願い。』

『分かったわ。』

ほむらの言うマホ連とは、魔法少女連合会の略称である。

今では魔法少女同士の相互協力の体制が整っている。

魔法少女連合会の主な仕事は、新人魔法少女の教育及び戦闘訓練、魔力の使いすぎによる消滅という不幸を防ぐための、

余分なグリーンフィードの回収と適切な分配、

苦戦中の魔法少女の援護、

そして油断の出来ない宇宙人であるインキュベーターの行動監視、などである。

改変前の宇宙において、ほむらがたった一人で、残酷で悲しい戦いを続けていた時とはえらい違いである。

彼女は、自分の様な悲しい思いをする魔法少女は、一人も出したくは、なかった。

だからこそ、ほむらはこのマホ連の創設に関して人一倍、尽力したのである。

そして、いまではキュウベえたち、インキュベーターさえ説得し、誰かが、魔法少女として契約する場合は全ての秘密を前もって当事者に教える事さえ、彼らに確約させる事に成功したのだ。

これはある意味、奇跡的な出来事だったが、

ほむらは、親友の『希望を持つ事は、絶対に間違っていない。』と
言う

信念を受け継ぎ、何年も、血のにじむ様な、努力を重ねて来たのであった。

そのため、彼女は魔法少女仲間から信頼される事となり、周囲から魔法少女連合会の初代会長に推されたが、自分はその器でないと、これを辞退している。

そして時空管理局との協力体制も、始まったばかりではあったが、おおむね、良好といえた。

明日は、その関係もあって、
《フェイト・テストアロッサ・ハラオウン執務官》と会うことになっている。

『それにしても。』

マミは、美しい夜空を見上げながら、別の話題を口にした。

『実体化して復活した、鹿目さんや、美樹さんと一緒に戦ったあの激戦も、

2ヶ月も過ぎてしまうと、記憶と言っか、現実感があやふやになって、
なんだか全てが夢だったような感覚になってしまいますわね。』

『.....』

『あ！ ごめんなさい、暁美さん、変な事を口走ってしまって。』

『いえ。』

『ほんとに、ごめんなさい。』

マミは本当に自分は悪いことをした、と言つすまなそう顔になつた。

『でもね。』

杏子が割り込むように、口をはさむ。

『もし、あの全てが、夢だったとしても、それはそれで、良いんじゃないか。』

『え？』

『ものすごく、良い夢だったんだからさ。』

『そう。そうよね。』

3人は、しばらく黙って、見滝原の夜空を見上げていた。

『あ、そついや、』

杏子が再び、口を開く。

『明日の、夕方だったよな。フェイトとの約束は？』

『ええ。集合場所も、集合時間も変更は無し。』

人払いの結界もフェイトさんの方で準備するそうだから、私たちは、ただ遅刻しないように現地に行くだけよ。』

『なんだか、うれしそうね、佐倉さん。』

『おう。あいつとは模擬戦の予定を早く決めたいからな!!』

これには、理由がある。

はじめて、魔法少女らと、魔導師たちが出会ったあの日、高町なのはが、うっかり口にした、

『本気になったフェイトちゃんほどじゃないとしても、
と言う言葉を杏子がしっかり聞いてしまっていたからだ。』

あれ以来、杏子はフェイトに対してライバル心むき出しで、結局いつか全力の模擬戦をすることを、フェイトに約束させたのだ。

杏子と違いほむらは、出会った時からフェイトに何か親近感に似たものを抱いていた。

彼女自身その理由は分からなかったが、知り合ってから、1ヶ月程たったある日、

フェイトの出自と過去の経緯を詳しく聞いて納得がいった。

彼女ら二人の背負っているモノが、

同じではないとしても、ほぼ同質と言えたからだ。

聞いた話によれば、フェイトは、

事故で娘を失ったある母親によって造りだされたいわゆるクローン人間の様なモノなのだ、と言う。

その母親は、フェイトを自分の道具として扱い、

本当の娘を生き返らせようとしたが、

それに失敗し、多くの多次元世界を崩壊の危機にさらすと言う次元犯罪を犯し、

その結果、一人で死んでいったのだ。

また、過去におきた別の事件の際、問題の、すでに死んだ娘が、疑似的な仮想空間の人格データとしてではあるが、フェイトの姉として出現し、姉と妹としての会話をを行い、その心に触れたそうである。

フェイトも、ほむらと同じく、

『この世界から去っていった誰か』の想いを、背負っていたのである。

しかし、フェイトはほむらにこう告げた。

今の自分はとても恵まれていると。

現在の自分は、子供の頃からの友人である、高町なのは、八神はやて、

そして、家族として迎えてくれたハラオウン家の人たちと、多くの人間によって支えてもらっているのだと。

実際、誰かがフェイトについての話をする場合、

『疑似生命』とか『人工生命体』といった用語を使うと、彼女の義理の兄や、今現在の母親が

『あの子は、れっきとした本当の人間です!!!』と言って、怒り出すのであった。

『明日、フェイトさんと会ったら、

何を話そうかしら?』

ほむらは、フェイトの事を思い出しながら、いろいろと考えたが、考えは、なかなか、まとまらなかった。

これ以上の魔獣の探索や、余計な思案は、時間の無駄になると考えたマミが提案する。

『じゃあ、明日に備えて今日の魔獣パトロールはお開きとしましよ
うか。』

『ええ。私も異論なし。』

『ああ、そいじゃ、明日な!』

ほむらは自宅に帰ると、簡単にシャワーを浴びてから、
ベッドに潜りこんだ。

『明日の件もあるし、少しでも、眠らないと。』

眠りに落ちる瞬間一つの疑問が、ほむらの頭の中に浮かび上がった。

『サイコクリスタル。』

キュウベえはサイコクリスタルと確かにそう言ったわ。
なぜ、キュウベえは、

あのロストロギア（古代遺物）の名称が、
サイコクリスタルだと知っていたのかしら?』

しかし、この奇妙な疑問からは、大して危険なおいは、感じない
と、ほむらは思う。

彼女の長年の直感がそう告げていた。

『たいした問題じゃないのかも。』

今度、キユウベえに直接聞いてみようかしら。
案外、笑い話のたぐいかもしれない。』

実際そうだった。ほむほむは、賢いな。

(第2章 サイコクリスタルの解説参照のこと。)

浅い眠りの中で、ほむらは、不思議な夢を見た。

とても深い、深い、深い闇の中、ほむらの前に一人の女性が立っていた。

彼女は黒い服装を着ており、美しい銀色のロング・ヘアをしていました。

さらに女性は、何かを祈るようなポーズで、目はとじておりどこか人間とは違う気配をもっていた。

しかし、ほむらは、その女性からは、深い慈愛の心と、そして、やさしげな、あたたかさのみを、感じていた。

彼女は口を閉じていたが、ほむらの心には彼女の声はつきりと響いてきた。

『どうか、忘れないで。』

『いつも、どこかで、誰かが、あなたのために、戦っている事を。』

『あなたが、彼女の事を覚えている限り、

あなたは、ひとりではありません。』

次の瞬間、女性の姿は消え、ほむらの目には、何かの映像が見えてきた。

それは、映画を見せられているようでもあり、又、夢を見ているようでもあった。

どこの場所かも分からぬ、広大な砂漠のような場所。

そして、ほむら達が2ヶ月前に戦った巨大魔獣以上に、おそろしく巨大な魔獣の群れが、砂塵の中をどこかへ向かって進行していく。

その魔獣たちは、平均で全高80メートル、大きいタイプで100メートルはありそうだった。

その、巨大な魔獣の群れの前に、一人立ち向かう者がいた。

それは、この映像を見ている、ほむら自身であった。

『あ、あれは私？

これは、未来の光景なの？』

ほむらは、疑問を口にするが、

先ほどの女性の声は聞こえず、彼女の疑問に答える者はいなかった。

映像の中のほむらは、背中から魔力エネルギーの翼を展開し、その後、一瞬なぜか、微笑んだような表情を見せる。

そして魔力の翼をさらに巨大化させて、魔獣の攻撃を防御しながら、そのまま空中に飛翔し、高高度から巨大魔獣の群れに対して特攻をしかけ、

その巨大魔獣の群れさえ飲み込む、巨大な魔力爆発を引き起こした。

それは『今現在のほむら』でさえ所有していない未知の能力だった。

しかし、ほむらが将来いかにパワーアップを果たしたとしても、そんな無謀な戦いを繰り返して魔力が持つ訳がなかった。

やがて、映像の中のほむらは力尽き、砂漠に倒れこんだ。

しかし、どこからか光輝く人影が、出現し、残った魔獣を消滅させた後、

倒れたほむらを抱きしめ、こう言った。

『がんばったね。 迎えにきたよ、 ほむらちゃん。 』

その周囲にも多数の光が出現し、二つの存在を見守るように輝いている。

そして人影と倒れたほむらの体は、強く光輝き、一つに溶け合うように消えていった。

『あれは、いったい？』

ほむらの疑問に、謎の女性の声が答える。

『人の運命も、星の未来も、

すべて決定されているものではありません。』

『定められていたはずの、この未来も今、変わりつつあります。』

『昔、ある人がこう言いました。』

過去は変えられない。だが、未来なら変えられる。

だからこそ、チャンスはまだまだある、と。』

そこで、謎の女性は、姿を再び現すと、ほむらに慈愛に満ちた微笑をみせる。

『ですが、あなたも、良く知っているように、』

勇気ある祈りを持って、』

過去の歴史と、宇宙の法則さえ変えてしまった者もいます。』

『だから、あなたも、どうか、希望を胸に、最後の最後まで、自分を信じて。』

そこまで言うと、謎の女性の姿は消え、ほむらの体はあたたかな、やわらかい光に包まれた。

気がつけば、ほむらは、なつかしい人に、優しく包まれていた。

『まどか……』

ほむらは、泣いている自分に気がついた。

ここは自分の部屋の、自分のベッドの上。

『え、私は？』

ほむらは、周囲を見回した後、重要な事を思い出した。

『いま、何時?!?!』

あわてて、近くの時計を掴み取り、現在時刻を確認する。

『し、しまった!! 寝過ごした!!』

ほむらは、飛び起きてから、

短時間で軽い食事を済ませると、大急ぎで、外出の準備を開始した。

第8章 あなたはとても強いから

フエイトとの約束の場所は、近くに大きな川が有る自然公園だった。

今は、午後3時半。

幸い、今日は天候に恵まれた。

雲一つない晴天とまでは、行かなかったが、日差しが暖かい。

『この地球』は、魔法少女とインキュベーターの存在、そして、魔獣の発生と言う要素を除けば、『なのは達の地球』と酷似していた。

しかしながら、惑星の地形データ・過去の歴史と、現在の各国の年号・季節の移り変わりまで同じとは、奇妙を通り越して、異常な一致と言える。

時空管理局の技術部の中でも、ガチガチの合理主義者で有名な、マリエル・アテンザは、この事実を知った際、

『こんな偶然、科学的にあり得ないわ！

オ、オカルトよ！！

私の大嫌いなオカルトよー！！！！！！』

と言って、三日間、寝込んでしまったそうだ。

『なのは達の地球』が、果たして、その歴史に対して、インキュベーターの様な、異星人文明の干渉を受けていたのか、どうかは、今後の研究課題と言える。

『この日本』は、現在、6月中旬であり、まだ夏の暑さは到来していない。

自然公園には、暖かくて、気持ちの良い風が吹いていた。

本来ならば、平日でも、家族連れや、カップルで賑わう場所であったが、フェイトが持参した時空管理局特製（人払い用（？）特殊結界装置）のおかげで、一般人は、自然と、公園に入ってきたがらない。

『え、ええと、ありがとうございます。』

フェイト・テストロツサ・ハラOWN執務官？』

何度か会って、個人的な話もしている仲なのに、直接会って会話する場合は、ほむらはまだ硬さが抜けていなかった。

『フェイトで良いですよ、ほむらさん。フルネームじゃ長すぎるもの。』

それじゃ何か緊急事態が発生したら

この通信装置でいつでも時空管理局に連絡してください。』

「分かりました。」

でも、これからは、この世界は私たちが守っていきます。
ここはあの子が守った場所、
いえ、私たちが皆で守った場所ですから。」

「そうですね。」

あなた達は、

特にあなたはとても強いから。」

「???。」

フェイトは、自分の親友である、なのはに何かあったら、
自分はどうなってしまうのか、と考える。

実際、2年ほど前には、なのはが、
大怪我を負う撃墜事件があり、
なのはが、回復し、完全に復調するまで
フェイトは、情緒不安定だった。

だから、フェイトは、

暁美ほむらの事を、とても強い人間だと思っただ。

「わたしがあなたの立場だったら、

そう、大切な友達が、仮にいつもそばにいても、
その姿が全く見えないなんて、触れる事も出来ないなんて、
私には絶対に耐えられない、

一週間と、もたず、頭がおかしくなるにきまつてる。

そしてだれかを憎んだり、キズつけたりするにきまつてる。

なののが……………

なののが、いない世界なんて!!

私は、全てを滅ぼしてしまうかもしれない。

…………… 母さんが、そうだったように

『そ、そんな事は』

『そんな事は絶対ないと、自信をもって言えないんです。

そんなわたしは、まだまだ弱い人間なんです』

フエイトは、このあと、彼女が守るべき少年と少女に出会い、その事をきっかけとして、真に強い女性へと成長していくのだが、それはまた別の物語である。

『では、行きましようか、キュウベえさん』

『話聞いた時は冗談かと思ったけど、

本当にその管理局とかに行ってくるつもりなのかよ?』

キュウベえの意向に、杏子は、首をかしげた。

この白い宇宙人は、

しばらく姿を見せなかったのにどこから来たのか、しかしキュウベえはいつもどおりである。

『そつわ。』

彼ら魔導師の体内に存在する魔力器官リンカーコア、
そして魔力運用デバイス、
それらを研究させてもらえたら、
君達の消滅を防ぐ事が可能になるかもしれない。』

『やけに親切じゃなか。めずらしい。』

『そりゃ、君達は優秀な人材だからね。勝手に消滅してもらっては
困るよ。』

『そうね、あなた達は、そう言うヤツラよね。』

ほむらが、思わず本音をもらす。

『それに、ボクらの一番の問題である
エントロピーの増大によるこの宇宙の滅亡の回避についても、
時空管理局の科学技術部門が相談にのってくれる事になった。』

『おー、そりゃよかったじゃん。』

ひとつこのように杏子が言う。

『と、言うかさ、悪い事をした宇宙人が連行されて行くようにも見
え。』

『あああー！ボ、ボクとした事が、大事な事を忘れてた。』

『何よ？』

あまり見た事のないキュウベえのあわてぶりに、

ほむらが率直に質問した。

『これだよ！これ！』

ボクがない間のグリーフシードの分解を行うための
処理装置を渡しておくの、すっかり、忘れてたよ
』

そう言うと、キュウベえは特殊な形状の機械をほむらに手渡す。

『操作方法は、ここの紙に君たちの言語で記入してある。
使用上の注意をちゃんと読んでね
』

『どこの、家電屋の店員だ、お前は？？』

すかさず、杏子がつっこみを入れた。

ほむらと、フェイトは、別れの握手を交わした。

その時、

やさしい風がふいて

ほむらの黒髪と、フェイトの金髪が
横に流される。

『どうかお元気で、フェイトさん
』

『ほむらさん。私、あなたと友達になれた事が本当にうれしいです。

また、お会いしましょう
』

フェイトと、キュウベえの足元に、空間転移用の魔方陣が現れる。

空間転移に巻き込まれないように、
魔方陣から、ある程度、離れた場所に移動した後、
ほむらは、フェイトに手を振った。

フェイトも、ほむらに向かって手を振る。

キュウベえも、二人の動作をまねしているのか、
「ウイング・ハンド」をブンブン振っている。

やがて、フェイトとキュウベえの姿は、
転移魔方の光の中に消えていった。

一方、

マミはさつきから黙って何かを考えていたようだが、
突然杏子に詰め寄る。

『あああああ！！　　佐倉さん！　　あなた！！！！』

『なな、何だよ、いきなり。』

『なぜか、いつだったかは、全く思い出せませんが、
あなた、私が鹿目さんに出したケーキを
横からぶんどって食べましたわね！！
しかも手でつかんで！！』

『何だよ、そりゃ！！』

『あたいの記憶には、ねーぞ、そんなの。』

『いいえ、忘れたとは言わせません！！』

『あれは絶対、絶対ゆるせません！！！！』

今回の事件でママの記憶の扉が変な感じに開いてしまったようだ。
いきなり魔法少女の姿に変身するママ。
もちろんその手にするのは愛用のマスキット銃。

『うわー！！ やめろ、バカー！！』

パン！ パン！

マスキット銃を、ぶっぱなしながら杏子を追い回すママ、
杏子も魔法少女の姿に変身して逃げ回る。

『あいたたたたたた！！』

いたい！！

いたい！！

いたい！！

いたってば！！！！』

一応、ママはマスキット銃の威力をエアガンぐらいに抑えているらしい。

また、杏子のソウルジェムを傷つけないように、
狙うのはもっぱら、杏子のお尻や、背中のような。

それでも当たれば十分に、いや、ものすげえ痛いのは当然だった。

二人は、自然公園の中をマツハ23（音の速さの23倍）

ぐらいのスピードで、ぐるぐる回りだした。

マミの銃撃で、公園のベンチや木々が、穴ぼこだらけになっていく。

さっきまで、エアガンぐらいだったマスケット銃の威力が、明らかに、危険ゾーンに達していた。

その事実気づいた杏子は、戦慄して、マミにどなりつける。

『うおっ?!』

あぶねえっ!!

こ、殺す気かあ?!』

『あなたが、よけるのが、悪いんでしょう?!』

『よけなきゃ、死んじゃまう、だろうが!!!!!!』

反論しながらも、杏子はジグザグに逃げ回る。

以前の杏子なら八子の巣にされてもおかしくない程の、

巴マミの連射スピードと正確な射撃だった。

しかし、フェイトとの模擬戦が幸いし、

杏子は効果的な高速機動戦を学習していた。

杏子のすぐれた高速回避に
ママがイライラし始める。

『ええい、もう、ちょこまかと！』

正義の怒りを、思い知りなさい！！』

『正義じゃなく、』

お前の、個人的な、しかも、

勘違いの、怒りだろうが！！！！』

『おだまりっ！！』

この私がつった絶品ケーキを、

横取りするなど、言語道断！！！！

なのは様が、許しても、

この私が、許しません！！！！！！』

『なのは様が、許したんなら、』

お前も、許せー！！！！！！！！！！』

ついに、ママがティロ・ファイナーレまで
使い始めたため、美しかった

自然公園は、もはや凄惨な戦場と化していた。
あちこちに、巨大なクレーターが出来上がり、
公園内の各施設は、すでに、壊滅状態である。

ほむらは、その光景をしばらく呆然と見ていたが、やがて吹き出して、笑い出した。

『え、暁美さん、あなた今？』

『わ、笑ったのか？』

マツハ23で追いかけて、
をしていたはずの二人が思わずフリーズする。

『私だって、笑う事ぐらい有るわよ。』

だって大好きなあの子にまた会えたんだもの。』

しばし、見滝原には少女たちの笑い声が響いていた。

後日、公共施設を破壊した魔法少女たちが
時空管理局に厳重注意をくらったのは、
言うまでもない。

終劇

第8章 あなたはとても強いから（後書き）

「次回予告！！（真）」

あの日、

一人の少女の純粋な祈りが、
全てに救いをもたらした。

誰もが、そう思っていた。

だが、マギカ宇宙の封印が破られし時、
始まっていたのは、

全多次元宇宙規模の『魔女狩り』だった？！

少女の涙が虚空に流れ落ちる。

『とめて・・・』

『お願い、

誰か、止めて。

神様でもいい。

悪魔でもいい。

あそこで、戦っている、わたしたちを、とめて！！！！！！』

次回、魔法少女リリカル マギカ
第2話

「緊急指令 鹿目まどかを 抹殺せよ!!!」
に、ご期待ください。

リリカル・マジカル 希望を胸に!!!

(現在、制作中)

おまけ

次回 うそ 予告 !!!

ユーノ君は、

ケガが完治していない高町なのはの事が心配だったので、
マジカ宇宙に行こうとしたのだが、何をどう間違えたのか、
別の時間軸のマジカ宇宙にまぎれこんでしまった。

しかも、暁美ほむらと、はちあわせ。

魔力を持った怪しいフェレットもどきを、
インキュベーターの一味と勘違いしたほむらは、
重火器を手にしてユーノ君を追い回す!!!

ユーノ君は、生き延びる事が出来るか？

白い悪魔は首をかしげ、不気味に笑う。

『まさか！

そんなの不可能に決まってるじゃないか！

ゲラ、ゲラ、ゲラ!!!!!!』

それ行け、QBハンターほむら!!!

次回、魔法少女リリカル マギカ
第二話 《ユーノの災難》
に、ご期待ください。

リリカル・マギカル 希望を胸に!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846t/>

魔法少女リリカル マギカ（第1話）魔法少女大決戦（改）

2011年8月7日20時30分発行